

第8回災害対策本部のシミュレーション演習(直下型地震)

これまで繰り返されてきた避難訓練や初期消火訓練では大きな地震には対応できないことから、当協会ではより実践的な訓練として、平成16年から毎年この災害対策本部のシミュレーション演習(図上演習)を実施している。既に多くの会員企業がこの演習に参加し、ノウハウを蓄積したことから、自社内で実施するケースも増えている。今回、第8回目を実施したので内容を報告する。

東日本大震災の直後ということもあり、関心が高く54名の参加があったが、5つのグループに分かれて同時進行で演習いただいた。

図上演習の進め方

この図上演習は正式には疑似災害演習(モック・ディザスター)と呼ばれるもので、参加者は災害対策本部の本部長、情報班長、消火班長などの本部を構成する保安要員となり、決められた時間軸(今回は地震発生時から60分間経過するまで)の間に起こるかも知れない被害や事象に対し、各役割に従った判断と指示、問い合わせに対する回答を行う訓練を行う。通常の訓練とは異なり、事前にシナリオは知らされておらず、60分経過するまで、リアルタイムに職場や外部より多数の被害の報告や問い合わせが災害対策本部に入ってくることになる(今回は60分間に48の事象が発生)。

また、演習をより現実近づけるために、毎回実在する事業所の防災組織、役割分担やレイアウトを使って演習しており、今回は日産自動車横浜工場に全面的な協力を戴き、横浜のエンジン工場が直下型地震により震度7の激震に見舞われたという想定で実施した。

演習の反省と改善すべき内容

これまでの図上演習と同じように、各グループとも大きく混乱した。理由として、①これまでに想定をしたことのない事象が次々と発生するので、パニックになる。②役割分担を忘れて、担当ではない事象にも気を取られ、各自の担当をうまくこなせない。③次々と入ってくる情報を簡潔に整理してまとめることが出来ない。④情報に優先順位



演習風景

演習シナリオ(48項目より抜粋)

経過時間	事象
0分	M7.3直下型地震発生、震度7
1分	打ち合せに来たお客さんが背中を打ってうづくまっている。どうすればよいか。
2分	食堂で厨房設備の下敷きになった従業員がいる。救出できないので応援を頼む。
7分	食堂より出火。現在初期消火中。
11分	工具室で胸を打った従業員がおり、意識はあるが受け答えが曖昧な状態。どうする。
35分	震度6の余震発生
37分	エンジン組立ラインの天井が落ち、消防副班長が倒れている。意識がない。
54分	視察に来ていた海外自動車メーカーのジョンさんが足を負傷。本国へ連絡を取りたいと言っている。
60分	外出中の工場長より、被害状況を速やかに報告するように指示があった。

が付けられないなどが上げられる。

次回からは、分担を再確認する機会を作る、情報を整理しやすくするための集計表を事前に作成して提供するなどの工夫を行い、より質の高い演習になるように努める。